**だれかが決めた普通じゃなくて**
**その人の普通をその人らしく生きられたらいい**
**これは地域で、たくさんの人に支えられて、支え、**
**いのちを尽くして生き合う人たちの記録**

前作『普通に生きる』が世に対する問題提起だとしたら、その続編であり新作の『普通に死ぬ』は、死を見つめ通うことで、この世に暮らす私たち全ての「生」を照らし出した強烈なカウンターパンチだと思う。福祉、医療、少子高齢化、社会制度、資本主義…現代社会が抱えている問題を、障害児の暮らしを通して見事に私たちの目の前に並べてみせた。

生きて、生きて、生きて、
普通に生きて

第25回
あいち国際女性映画祭2020
招待作品

# 普通に死ぬ

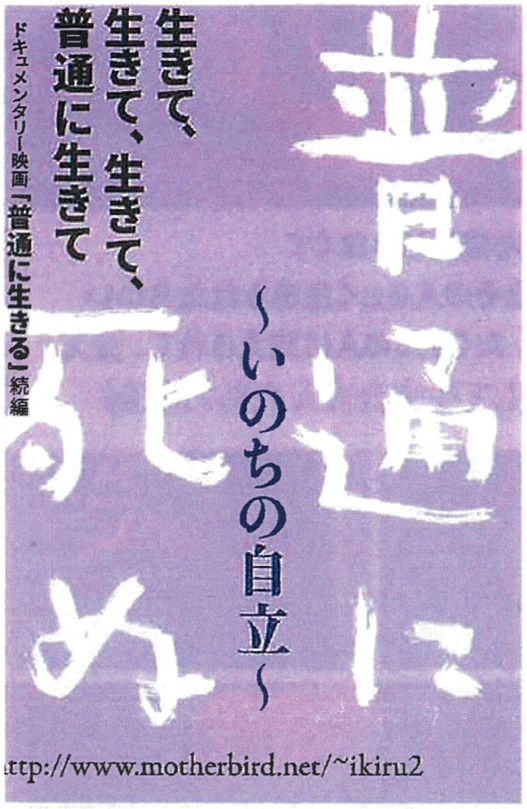
## ～いのちの自立～

キュメンタリー映画『普通に生きる』続編

その人らしく生きてその人らしく死ぬ。この映画はガチガチに固まった既成概念や正論に縛られ、身動きしづらくなっている私たちに、新しい考え方を提示してくれる希望の作品だった。

020／長編ドキュメンタリー映画／
／カラー／119分
作：motherbird・Cinema Sound Works
作・配給：motherbird
者：中山隆匡
楽：木 -Kodama- 霊
ーター：余 貴美子
コデューサー：梨木かおり／貞末麻哉子
督・撮影・構成・編集：貞末麻哉子

年齢を重ねてゆく重い障がいがある人とその家族…。在宅生活の中心的ケアラーが病に倒れると、残された医療的ケアの必要な人が、生まれ育った「地域で生きる」ことはなぜこれほどまでに困難なのか。前作『普通に生きる』から十年。家族と支援者の葛藤や気付き、「一緒に生き合う」取り組みを追い、厳しい現実から希望を見出すドキュメンタリー。




## イントロダクション

前作『普通に生きる～自立をめざして～』では、「どんなに重い障害を持っていても、本人もその家族も普通に生きる」という理念のもと、重症心身障害児・者と呼ばれる人たちの家族で起ち上げた社会福祉法人が、静岡県富士市と富士宮市にふたつの通所施設（生活介護事業所）〈でら～と〉と〈らぼ～と〉を開所させる五年間を追いました。

法制度の改革の波に揉まれつつも「福祉の受け手から担い手となる」発想で行政に働きかけて、理事である親たちは、自分たちのニーズに合った制度やサービスをつくりあげてゆきました。

続編となる本作『普通に死ぬ～いのちの自立～』は、その後、グループホームの開所や、設立十年を迎えて次第に変わりゆく運営方針や、3つ目の事業所建設という流れの中で、年齢を重ねてゆく本人とその家族を八年にわたって撮影しました。その途中、「医療的ケア」を必要とする人の、在宅生活の中心的ケアラーであった母親が病に倒れます。残された子の母亡き後の地域生活…そこには厳しい現実がありました。

なぜ、医療的ケアが必要だと、「地域で生きる」ことが難しいのか。なぜこの人たちの生活や人生を社会が障害することになってしまうのか…。

映画は厳しい現実を見据えつつ、後半、家族と支援者、医療者の葛藤や気付きを物語の軸に、兵庫県へと、希望を探して旅に出ます。

そこには、伊丹市で〈しぇあーど〉を率いる李国本修慈さんと、西宮市で〈青葉園〉を率いる清水明彦さんらの重ねてきた地道な活動がありました。軽快でしなやかで、しかしとても健やかに人生を賭けて、真正面から繰り広げられている「一緒に生き合う」取り組みがありました。

この映画は障害児とその家族を追ったドキュメンタリーではあるが、そこから見えてくるものはリアルな私たちの生活である。膨大に毎日を生きる人々の営みを、長い時間をかけて信頼関係を築きあげて創られた「普通に死ぬ」。そこに障害者も健常者もない、障害者がその人の人生を謳歌を持って生き、死ぬことのできる社会は、きっと全ての人の人生も輝かせる社会だ。